彦根城世界遺産登録推進シンポジウム

『彦根城の世界遺産と地域づくり』

彦根城世界遺産登録推進協議会

令和４年（2022）12 月 18 日（日）

彦　根　城

【沿革】

1600 年、関ヶ原合戦で徳川家康が勝利した後、腹心の井伊直政に佐和山城を任せた。井伊家による、近江東北部の支配の始まりである。

その後、1603 年 2 月、征夷大将軍となり、日本の統治を担うようになった徳川家康は、その直後に、井伊家の居城を彦根山に移すことを命じた。

当初は、徳川幕府の命令で近隣の大名たちが動員され（公儀普請）、築城工事が進められた。また、1606 年に完成した天守は、大津城の天守は、大津城の天守の一部を移したものと伝えられる。

彦根城の建設工事は、天守が完成した後に、一旦中断したが、1615 年の大坂の陣を経た後、井伊直孝の下で、彦根藩の単独工事として再開され、1622 年頃まで継続した。さらに、第二郭の北部に玄宮園と呼ばれる庭園が整備されるなど、17 世紀後半頃までにその姿を完成させた。その後、18 世紀後半に藩校が開設されるが、彦根城は 17 世紀後半頃までに完成したその基本的な姿を変えることなく、井伊家・彦根藩の統治拠点として機能し続けた。

1867 年の大政奉還により、彦根城は幕藩体制の統治拠点としての役割を終了した。

その後、県庁や陸軍の駐屯地として利用されたこともあったが、1879 年 9 月、彦根城内の建物を撤去することが決められた。

しかし、地元の住民たちは、彦根城を保存することが地域住民の心を一つに結びつけることにつながると考え、彦根城の解体中止を関係各所に働きかけた。1879 年 10 月、明治天皇の行幸に随行していた大隈重信が取り壊しの進む彦根城を訪れ、解体を悲しむ地元住民に心を動かされ、明治天皇に彦根城の保存を進言。明治天皇がその意見を受け入れ、彦根城の永久保存が決定した。

彦根城は、その後、陸軍省から宮内省に移管され、1894 年に井伊家に譲渡、1944 年、井伊家が彦根市に寄付し、現在に至っている。

戦後の 1951 年以降、彦根城天守をはじめ、櫓や馬屋などの歴史的建造物が国宝・重要文化財に、彦根城の中堀より内側の空間に中堀沿いの埋木舎を加えた範囲が特別史跡に、玄宮楽々園の範囲が名勝に順次指定され、文化財としての保存活用が開始された。

【彦根城のＯＵＶ（22/07/03 時点）】

彦根城は、日本列島の中央部に位置し、江戸時代（1603-1867）において、藩による統治拠点として機能した城郭である。本資産は、周辺から隔絶された一体的な空間構造と象徴的な形態を持ち、２世紀半にわたる安定した社会秩序を形成した徳川幕藩体制の仕組みを反映していた。彦根城は、幕藩体制を支えた城郭の中でも、幕府と藩、藩と領民の特異な均衡関係によって成り立つ体制の仕組みを完全な形で現在に伝える唯一の城郭であり、人類史上の１つの時代を画した統治体制の仕組みを示す物証として、顕著な普遍的価値を有している。

彦根城の特徴

本資産は、琵琶湖畔の小高い丘を中心に築かれており、城郭全体の空間構造は、二重の堀によって区分されている。内側の郭には大名の御殿が構えられ、それを取り囲む形で、外側の郭には大名の統治を補佐する重臣たちの屋敷が配置された。すなわち、大名と重臣の住まいと、彼らが藩の政治方針を決定する中枢機能は、周辺から隔絶された城内で完結していた。また、城内に配置された御殿の広間や能舞台、庭園、茶室では、彼らが互いの立場を確認し結びつきを強める儀礼が行われ、体制の維持に貢献した。藩の統治に必要なこれら全ての機能が集約された城郭全体は、圧倒的な存在感の石垣と堀によって城下町や周辺の村から隔絶され、その内側が特別な空間であることを演出していた。天守を頂点とする象徴的な姿は、幕府から権威を与えられ、この地を統治する藩の存在を、町や村、街道、湖上を行き交う人々に対して効果的に印象付けていた。

世界史における江戸時代・近世城郭

17 世紀から 19 世紀の世界は、東西半球の一体化が社会変化を促した結果、各国で統治体制が再編され、近現代の前提となる社会の在り方が形成された重要な時期である。この時期に成立した日本の徳川幕藩体制は、2 世紀半にわたって安定した社会秩序を維持することに成功した。その統治において重要な役割を果たしたのが藩である。すなわち、大名は、幕府によって各地に配置され、領内の統治に専念する限りはその立場を保障された。また、重臣たちも自身の領地から引き離され、城郭の中に集住した。これにより、全国的にも領内においても、争いを回避することができた。大名と重臣たちは、城郭を拠点にして、領地全体を統治する藩の政府を組織し、領民の暮らしを保障し、社会の秩序を維持した。この長期の安定のもとで、日本の個性的な社会の在り方や文化が発展した。

彦根城が代表すること

彦根城は、藩主の井伊家が将軍を支える最も重要な地位の大名だったため、幕藩体制

の形成初期に、幕府自らの命令によって新たに築かれた。その後、井伊家は、幕藩体制の仕組みを反映した彦根城の空間構造と形態を 17 世紀のうちに完成させ、19 世紀半ばまでその状態を維持した。さらに、幕藩体制終焉後の 19 世紀後半以降、統治拠点としての役割を終えた全国の多くの城郭が失われた中で、地域の人々の総意によって破壊を免れ、心のよりどころとして現在まで大切に保存されてきた。

したがって、彦根城は、徳川幕藩体制を成立させた藩の統治拠点としての城郭の形を完全に残す、最も顕著な見本である。彦根城を通して、世界史的にみた徳川幕藩体制の特殊性を理解することができる。

城郭全体の空間構造を見ると、石垣と堀によって周辺から隔絶された空間の中に、御殿や重臣屋敷などの統治に必要な諸施設が集約されていたことが分かる。

城下町や周辺の村から見た、天守を頂点に櫓、石垣、堀が折り重なった形態は、幕府から権威を与えられ、統治の権限と責任を持つ藩の存在を象徴している。

【評価基準（22/07/03 時点）】

評価基準(iii)：現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

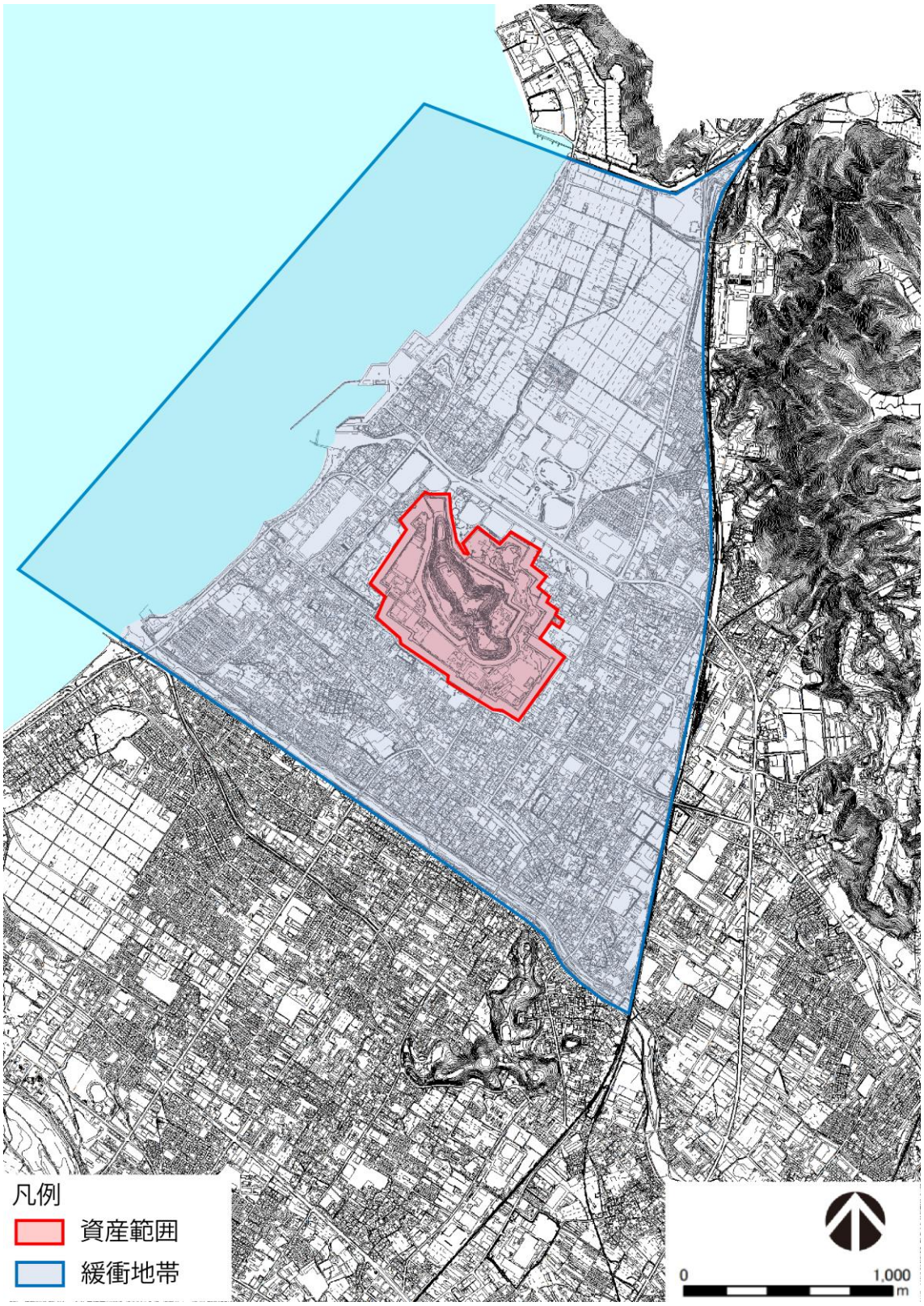
彦根城は、周辺から隔絶された一体的な空間構造と象徴的な形態によって、2 世紀半にわたる安定的な社会秩序を形成した世界史的に特殊な統治体制の仕組みを伝承する希有な物証である。

徳川幕藩体制において、幕府から各地の統治を委ねられた大名は、重臣たちを個別の領地から引き離し、統治の機能を城内に集約することで、争いを回避し、安定した社会秩序を形成することができた。その安定のもとで、日本の個性的な社会の在り方や文化が発展した。城郭は、藩の統治に必要な機能を集約した拠点施設であり、その空間構造と形態は、藩の性格と役割、争いの回避を可能にした統治の方法を目に見える形で示している。これら全国の城郭の中で、彦根城は、幕藩体制の仕組みを完全な形で現在に伝える唯一の例である。

評価基準(iv)：歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観の類型・典型を代表する顕著な見本である。

彦根城は、近現代の前提となる社会の在り方が形成された 17 世紀から 19 世紀における、世界史的に特殊な統治体制の仕組みを反映した、藩の統治拠点として機能した城郭という類型を代表する顕著な見本である。

藩の城郭は、領地全体を統治する拠点施設として、17 世紀のうちに完成し、19 世紀半ばまで機能した。石垣と堀によって周辺から隔絶され、統治のための機能が集約された空間構造は、大名を中心に組織化された藩の性格と役割を示している。天守を頂点とする城郭の形態は、幕府から権威を与えられ、統治の権限と責任を持つ藩の存在を象徴している。このように、空間構造と形態の両面によって統治体制の在り方を可視的に示す、類型化された拠点施設は、17 世紀から 19 世紀の世界において他に存在しない。全国の城郭の中で、彦根城は、空間構造と形態を完全な形で現在に伝える唯一の例であり、その最も顕著な見本である。



彦根城の資産および緩衝地帯の範囲（R4.6　現在）